

第261回くらしの植物苑観察会 令和2年12月19日(土)

「体験講座 桜草を植え替えてみよう」

山村 聡(国立歴史民俗博物館 専門職員)

桜草は、シベリア南部から中国東北部、朝鮮半島、日本では四国・沖縄を除いた、北海道から東北の低地、関東から中部・山陰・九州の高原の湿性地に自生しています。江戸時代になると、荒川下流の原野に二次的な自生地が生まれ、埼玉県の田島ヶ原、戸田ヶ原、東京都北区の浮間ヶ原などに大群生地が生まれました。田島ヶ原は、1920(大正9)年に桜草の自生地として「国の天然記念物」に指定され、1952(昭和27)年に「国の特別天然記念物」に指定されました。今日でも、自然状態で残された大群生地を見ることができます。

桜草が熱心に栽培されるようになったのは、江戸時代の中頃、野生の桜草の中から探し出された変わり花をもとにして多くの品種が作出されました。最盛期では300種を超える品種が記録されており、今日でも江戸時代に作出された‘南京小桜’や‘駅路の鈴’などの品種が現存し栽培されています。また近年では、八重咲や巨大輪(4倍体)などの品種も作出されています。

今回の観察会では、桜草の基本的な植え替え方法を紹介していきたいと思います。

【植え替え】

- 1、鉢から取り出し、培養土と桜草とに分ける。
- 2、桜草の芽分け(株分け)を行う。芽や根茎の大きさ(大・中・小)に分ける。
*性質上、小さい芽(株)には花は咲きません。
- 3、根の腐ってしまった部分やコブがあったら、取り除く。



- 4、鉢の中に鉢底石を敷き、培養土を鉢の半分くらいの高さまで入れる。
芽分けした大きい芽(1番芽)を4芽、追いまわし式と言われる並べ方で並べる。
芽の配置(高さ・位置)に気を付ける。



5、並べた芽を軽く押さえながら培養土を1~2 cm程度かけ、鉢の上縁(ウォータースペース)を2~3 cm程あけておく。

6、植え替え後の生育状態と開花



7：花後の管理として、増し土という作業を行う。性質上、新芽が培養土の表面近くまで、伸びることがあり、新芽の乾燥を防ぐために培養土を足してあげる。

【育て方】

置き場所：秋から春にかけては、日あたりで風通しの良い場所

梅雨から秋にかけては、半日陰で風通しの良い場所

培養土：一般に販売されている草花培養土や赤玉土と腐葉土を混ぜたもの

*くらしの植物苑では、赤玉土5割、腐葉土3割、鹿沼土または軽石2割の割合で混ぜ、元肥に緩効性肥料を培養土1ℓに1~3gを入れ、均一に混ぜ使用

鉢底石：軽石や赤玉土などの中~大粒

水やり：表面が乾いてきたら与える

夏の高温時期は早朝又は夕方以降に、冬の低温時期は午前中に与える

肥料：元肥…緩効性肥料を培養土1ℓに1~3gを入れ、均一に混ぜ使用

追肥…液体肥料(1000~2000倍)を花後、2~3回ほど与える

増し土：花後に2 cm程度、培養土を足す

植え替え：11月~2月

病虫害：ヨトウムシ、コガネムシ、ナメクジ、ネコブセンチュウ

高温多湿の際に白絹病が発生することがある

.....

次回予告 第262回くらしの植物苑観察会 令和3年1月23日(土)

「くらしの中に息づく植物—園芸植物の歴史」天野 誠(千葉県立中央博物館)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名